海外舞踊文献紹介 I

本稿では，17世紀後半から19世紀前半を対象とした西洋舞踊史研究書を紹介する。なお，『舞踊學』第21号（1998）に，鈴木晶氏によるバレエ史研究書紹介が掲載されていることを考慮し，ここでは1999年以降に出版された文献を取り上げる。

① Ivor Guest. *Ballet under Napoleon.* 528p. London: Dance Books, 2001.

バレエ史研究の大御所ゲストの最新書。18世紀後半から19世紀前半にまたがる時代は，舞踊史研究のいわば空白期とも言える時代であり，研究書もいまだ数少ない。このような状況をふまえ，ゲストはフランス，アメリカ，イギリス各地の図書館，古文書館に所蔵されている膨大な一次史料を駆使しながら，まさにその空白の時代を再構築しようと試みる。そういった試みの成果が，1996年に出版された *The Ballet of the Enlightenment*（London：Dance Books）と，その続編たる本書である。前者が1770年から1793年を扱うものであるのに対し，本書では1793年から1820年にかけてのパリ・オペラ座が考察の対象に据えられている。

政治体制が目まぐるしく変化するこの時代にあって，しかしパリ・オペラ座は文化の殿堂としての地位を依然として保ち続ける。そこで上演されるバレエもまた，徐々に成熟の度合いを増していく。成熟，すなわちそれは，バレエがオペラと袂を分かち，自律的な作品としての性格を強くしていく過程だと言い換えることも出来る。フランス大革命直後，すでにオペラからの独立を果たしていたとは言え，舞台芸術としてはいまだマイナーなジャンルに留まっていたバレエが，18世紀末から19世紀へと進むにつれ，オペラと同列の座を占めるまでに成長していく。その際，その過程においてとりわけ重要な役割を演じたのが，1787年から1820年までパリ・オペラ座のメートル・ド・バレエの任にあったピエール・ガルデルであった——と，本書の描き出す歴史の大筋をたどればこのように要約されることになろうが，しかし，本書におけるゲストの試みを，こういった大筋の提示だけに還元してしまっては必ずしも適切ではないだろう。むしろ，本書の特色は，膨大な史料の読みこみに裏付けられた，歴史的ディテール（その中には，例えば，当時のパリ・オペラ座ダンサーの位階制度に関する細かな情報から，ナポレオンの戴冠時に上演されたレパートリーに関する文化史・社会史的考察まで，あらゆる次元の問題が含まれることになるのだが）の描写にあるように思われる。いずれにしても，本書が今後，プレ・ロマンティック・バレエ研究の分野における必携書となるであろうことは疑いの余地がない。

② August Bournonville. *Letters on Dance and Choreography.* Translated and annotated by Knud Arne Jürgensen. 77p. London：Dance Books, 1999.

ここに英訳されたオーギュスト・ブルノンヴィルによる一連の論考は，1860年，パリで発行されていた週刊紙「リュロップ・アルティスト L'Europe artiste」に，8回にわたって掲載されたものである（原文はフランス語）。8通の手紙の体裁をとるこれらの文章には，「ダンスとコレグラフィについての手紙 Lettres sur la danse et la chorégraphie」という共通タイトルが付けられている。このタイトルからもすでに明らかであるように，ここでオーギュスト・ブルノンヴィルは，終始一貫してノヴェールへの共感を表明し続けている。のみならず，ブルノンヴィルが展開している議論の端々に，ノヴェールの影響を読み取ることが出来る。例えば，劇のスムーズな展開を阻害するようなディヴェルティスマンの使用に対する批判，技術偏重の傾向に対する批判，舞踊記譜システムの使用への懐疑（ただしブルノンヴィルは，これを全面的に否定しているわけではない）など，いずれもちょうど100年前にノヴェールが展開した議論と重なるものとなっている。しかしそれと同時に，このブルノンヴィルの『手紙』の中には，タリオーニ，エルスラー，グリジといった19世紀の舞姫達への言及，あるいは当時のパリ・オペラ座のあり方に対する諸々の提言なども含まれており，その意味で，19世紀舞踊史の貴重な証言としての側面をも持ち合わせていると言える。

なお，この書の冒頭には，訳者であり，またブルノンヴィルの専門家でもあるユルゲンセンによる解説が添えられている。

③ George Dorris, ed. *The Royal Swedish Ballet. 1773-1998.* 160p. London：Dance Books, 1999.

本書は第1部「歴史」と，第2部「復元」から成る。うち第1部は，1773年創設時からの王立スウェーデン・バレエ団の歴史を，8章，8人の執筆者によって概観するものとなっている。一方，第2部は，過去の作品の復元に関する問題を論じた3篇の論文（Regina Beck-Friis "Some Sources of Dance Technique for Reconstructing Eighteenth-Century Ballets" 121-126pp. ／ Ivo Cramér "Some Sources for Reconstructing Commedia dell'Arte Ballets" 127-130pp. ／ Kenneth Archer & Millicent Hodson

"Twentieth-Century Reconstruction : Poetic Justice for Jean Börlin" 131-144pp.）から構成されている。本稿は，17世紀後半から19世紀前半を対象とした舞踊史研究の紹介を目的とするので，ここでは第２部のベック＝フリース，クラミール各氏の論文を取り上げる。

舞踊史研究と一口に言っても，その目指すところも，その方法論も多様である。しかし，それらをまず二つの主要な傾向に大別することが可能であろう。すなわち，過去の舞踊をめぐる様々な現象を叙述のスタイルによって提示する歴史学的な研究と，最終的に過去の舞踊そのものの提示あるいは上演を目指す，より実践的な研究の二種である。うち後者は一般に「復元 Reconstruction」と呼ばれる。

過去の舞踊の復元に際しては，図像資料，当時の各種教則本，舞台評など，様々な史料を駆使することが求められるが，そういった史料の中でもとりわけ多くの有益な情報をもたらしてくれるのが舞踊譜である。ところが，18世紀，特に1730年代以降のヨーロッパの舞踊に関しては，その舞踊譜の不在――つまり，当時の舞踊語法に十全に対応しうる記譜システムが存在しなかったがために，作品の全体像を復元するに足る情報を備えた舞踊譜が残されていないのだ――が復元作業の障害となることが少なくない。とするならば，その舞踊譜の不在を補完し，この時代の舞踊を復元する手がかりを与えてくれる史料として，どのようなものがあるのかという点が問題になってくる。上に挙げた２篇の論文はいずれも，この問題に正面から取り組んだものとなっている。

ベック＝フリースは，18世紀舞踊の復元の際に参考にしうる当時の文献として，ナポリ出身のダンサー，ジェンナロ・マグリの舞踊教則本を挙げている（Gennaro Magri. *Il trattato teoretico-prattico di ballo.* Napoli, 1779.）。各種のポジシオン，パの説明，メヌエット，コントルダンスの踊り方の説明等が含まれたこの書については，メアリー・スキーピングによる英訳本（Gennaro Magri. *Theoretical and practical treatise on dancing.* Translated by Mary Skeaping with Irmgard Berry. London : Dance Books, 1988.）も出版されているので，興味をお持ちの向きはこちらも参照されたい。

一方，クラミールは，18世紀を通じて人気を博し続けたコメディア・デラルテ・バレエの復元の問題に焦点を絞っている。コメディア・デラルテ・バレエ，すなわち，コメディア・デラルテのキャラクターが登場するパントマイム入りバレエでは，滑稽な動きがしばしば用いられる。だが，その滑稽な動きとは具体的にどのようなものなのか。クラミールによれば，前述のマグリの書の他，次の二点の史料が参考になるという。まず，大英図書館所蔵の舞踏譜「Chacoon for a Harlequin」（London, 1730）。ボーシャン＝フイエ・ノーテーションによって記譜されたこの舞踏譜には，道化特有の滑稽な動作に関する指示が含まれている。そして第二に，ランブランツィの舞踊教則本（Gregorio Lambranzi. *Neue und curieuse theatralische Tantz-Schul.* Nuremberg, 1716）。101点の図版と，その簡潔な解説を含んだ本書は，18世紀バレエのコミカルなスタイルを伝える「最も豊かで最も貴重な資料」であるという。

④ Marian Smith. *Ballet and Opera in the Age of Giselle.* 306p. Princeton & Oxford : Princeton University Press, 2000.

舞台芸術としてのバレエを研究対象とする場合，その総合芸術的な質ゆえに，しばしば学際的なアプローチが求められることになる。ここに挙げた音楽学者スミスの著作も，そのような要請に答えるものとなっている[ii]。

この書は，フランス七月王政期（1830～1848）のパリ・オペラ座のレパートリーを考察の対象としている。17世紀から少なくとも18世紀の半ばまで，しばしばオペラの一部として演じられてきたバレエも，七月王政期までには自律的な芸術形式としての体裁をひとまず整えるに至る。とは言え，七月王政期のバレエは依然として多くの要素をオペラと共有していたのだ，とスミスは主張する。実際，当時のパリ・オペラ座にあっては，振付家，作曲家，台本作家から裏方に至るまで，多くのスタッフがオペラ制作とバレエ制作の両方に携わっていた。そのような事情もあって，バレエとオペラとは，時代設定，プロット，衣装，あるいは身振りなど，あらゆる要素を共有することとなった，という。また，オペラとバレエいずれも，「物語を語ることが出来るし，またそうあるべきである」と考えられていた。ゆえに，基本的に言語を表現手段として使用しないバレエにおいても，補助的手段による言語的情報の伝達が試みられた。その中には，登場人物の会話に至るまで詳しく記してある台本や，文字が書きこまれた小道具など，実際に文字情報に頼った例も認められるが，それとは別に，様々な効果的音楽表現（描写的なモティーフの使用，よく知られた歌曲の旋律の引用等）も用いられた，とスミスは指摘する。そして，そういった音楽的な工夫が随所にちりばめられている実例を示すべく，本書の第６章では，1841年に初演され，今日なお世界各地のバレエ団のレパートリーに定着している《ジゼル》の音楽分析が展開される。初演時の台本，アダンの自筆総譜，リハーサル譜を用いたこの分析を通じて，最終的には，初演時の《ジゼル》の音楽がいかに物語の展開と

（今日考えられている以上に）密接に結びついていたかが明らかにされることとなる。

なお，スミスは，革命時から1848年までのオペラ・バレエ批評の問題を扱った以下の書にも論文を寄せている（Roger Parker & Mary Ann Smart. *Reading Critics Reading. Opera and Ballet Criticism in France from the Revolution to 1848.* N.Y. : Oxford University Press, 2001. スミスの論文は，"About the House" 215-236pp.）その内容は上掲書の議論と重なる部分も少なくないが，合わせて参照されることを勧めたい。

---

[i] ここでの「コレグラフィ」は，「舞踊記譜法」と「振付」の両義を持つ語として提示されている。

[ii] このスミスの著作は，舞踊と音楽の問題を論じたものであるが，この他に，フランス・アンシャン・レジーム期の舞踊と視覚芸術との関係を論じた以下の書も，学際的研究の一例として挙げられるであろう。

Sarah R. Cohen. *Art, Dance, and the Body in French Culture of the Ancien Régime.* Cambridge, N.Y., Melbourne & Madrid : Cambridge University Press, 2000.

（森　立子）

海外舞踊文献紹介 II

1980年代から今日までの間にフランス語で出版された舞踊関連の文献のうち，20世紀以降のバレエ（特にディアギレフのロシア・バレエ団）及びコンテンポラリー・ダンスに関わるものの中から主なものを取り上げる。

0．事典

最近のものとして最も入手しやすい事典は，Philippe Le MOAL が編纂した *Dictionnaire de la danse*, Larousse, 2000 であろう。また，Bordas 社は演劇（*Le Théâtre*）及びオペラ（*L'Opéra*）に関して，読み物としても優れた事典を編纂しているが，1981年に出た同シリーズのバレエの巻 André et Vladimir HOFMANN, *Le Ballet*, Bordas, 1981 は，いささかコンテンポラリーに関する部分が手薄である。

ただし，バレエの発祥に始まり，18, 19世紀についてはカラーの図版も豊富であり，基本文献として目を通しておく価値がある。

この *Le Ballet* の欠落部分をちょうど良く補っているのが，同じく Bordas 社から刊行された，Marcelle MICHEL et Isabelle GINOT, *La Danse au XXe siècle*, Bordas, 1995 である。フランスで言うコンテンポラリー・ダンス，あるいはヌーヴェル・ダンスといった新しいダンスについて，その動向や傾向の分析が豊富な図版とともに示されている。また，巻末にはユベール・ゴダールの論文などもあり，事典というよりも論文集に近い，極めて濃密な内容である。

もちろん，フランスでも Selma Jeanne COHEN (Founding Editor), *International Encyclopedia of Dance* (Volume I - VI), Oxford University Press, 1998 は，主要な図書館に備えられており，英語文献でありながら広く利用されている。

1．歴史研究（バレエを中心とする）

出版年代はかなり古いが，宮廷バレエの時代から20世紀のダンスに至るまで，数多くの魅力的なテマティックをたてて論じた名著として，まず Marie-Françoise CHRISTOUT, *Le Merveilleux et le Théâtre du silence en France à partir du XVIIe siècle*, Mouton, 1965 をあげておきたい。日本では，クセジュ文庫から『バレエの歴史』というコンパクトな翻訳が出ているが，こちらは *Le Merveilleux* の上澄みだけをごく少量，すくい取ったものにすぎない。博士論文を母体にしたクリストゥの *Le Merveilleux* には，研究書としての緻密なデータの

積み上げ，明快な論理構築に加えて，研究書特有の無味乾燥な文体からはほど遠い高度に詩的な表現までが備わっている。日本でもいくつかの図書館がこの本を所蔵しているので，ぜひ閲覧して，フランスにおける旧制度の博士論文レヴェルの高さに瞠目してほしい。

クリストゥの前掲書にくらべると，注が全くついていないという点で研究書としての利用価値はぐっと低くなるが，Ivor GUEST の著作もレフェランスとしては重宝だ。

特に，初版（1976年）が改訂されて2001年に新たに出た *Le Ballet de l'Opéra de Paris*, Flammarion/Opéra National de Paris は，印刷技術の向上もあって，同じ図版を使っていても，初版に比べて写真のクオリティ（再現性）が遙かに高い。さらに，初版の発行以降に新たにレパートリーに入った80～90年代の作品については，初版にはなかった美しいカラーの舞台写真も多数盛り込まれた。もちろん，オペラ座のレパートリーに入っている作品の一覧表も，1776年から改訂版発行時の2000年12月分まで収録されている。1681年以来の主席舞踊手及びメートル・ド・バレエのリストも所収。ただし，本文には注がついておらず出典が明示されていないから，事実確認のために原典を探す必要がある。一般に，複数の研究書を参照してゆくと，たとえ「歴史的事実」であっても，それを叙述する立場によって「事実」が食い違っている，ということがしばしば起こる。論文に引用する前に，それぞれの「事実」の出所を現地の図書館などで確認するのは，実はかなり手間のかかる作業だ。

これに対し，19世紀のロマン主義時代に限定され，かつ重点はバレエよりもオペラにおかれているものの，Catherine JOIN-DIETERLE, *Les décors de scène de l'Opéra de Paris à l'époque romantique*, Picard, 1988 には出典の明示された図版と資料が数多くおさめられている。特に，ロマン主義時代の観客層を端的にあらわすカリカチュアの版画などが興味深い。BNF（Bibliothèque Nationale de France＝フランス国立図書館）の入館証を持っていれば，パリ・オペラ座図書館＝美術館でこれらのオリジナルの版画を手にとって見ることも可能である。

研究書というよりは，一般読者にもとりつきやすいように書かれているのが，Jean-Pierre PASTORI, *L' Homme et la danse: Le danseur du XVIe au XXe siècle*, Office du livre et Ed. Vilo, 1980 だ。タイトル中の homme はここでは人間一般を指す，というよりも「男性・女性」を区別する時の「男性」の意味で用いられており，全般的に「男性舞踊手」の分析に重きをおいて，男性舞踊手が文化的に占めてきた位置・役割の歴史的変遷がたどれるようになっている。語り口は平易だが，19世紀の男性舞踊手と女性舞踊手の賃金格差や，「舞踊手など（女性を持ち上げるだけだから）車夫・馬丁にもつとまる」という政治家の暴言まで，興味深い話題の多くが出典とともに示されているので，読み物としておもしろいだけでなく，研究者にも有用だ。

さて，オペラ座に関する研究書は星の数ほどあるものの，その多くはオペラに焦点を絞っていることが多いため，バレエに関する記述は到底十分とはいえない。とはいうものの，Frédérique PATUREAU, *Le Palais Garnier dans la société parisienne, 1875-1914*, Mardaga, 1991 は，パリ・オペラ座図書館や AN（国立古文書 史料館）の様々な文献・資料をつぶさに調べて書かれた労作であり，劇場の運営・経営，財政状態や観客論といった視点から，精緻な分析がなされている。特筆すべきはすべての資料の出典が一点残らず明記されており，人名・作品名の索引もついていることで，研究書として極めて利用価値が高い。とりわけアボネ（定期会員）をとりあげた第７章では，当時男性のアボネにのみ許された様々な特権について詳述してあり，興味深い。

同様に，Jean GOURRET, *Ces hommes qui ont fait l'opéra, 1669-1984*, Albatros, 1984 もまた，音楽アカデミーの設立以来，様々な組織的変遷を経てきたオペラ座の運営状況を，その支配人を軸として詳述した研究書である。オペラ座の法的立場を定めてきた1669年以来の様々な法律文書のほか，歴代オペラ座総支配人の一覧，オペラ座の会計報告・決算書なども採録されている。いずれの著作も，オペラ座の芸術的側面よりは行政的側面に注目して書かれているが，一見無味乾燥のそれらの数字が一旦分析されると，そこにどれほどのドラマがひそんでいるものかが明らかとなり，唖然として目を見張るばかりである。

２．バレエ・リュス（＝ディアギレフのロシア・バレエ団）

未だ日本では翻訳が出ていないが，Lynn GARAFOLA, *Diaghilev's Ballets Russes*, Oxford University Press, 1989 は，英語文献とはいえ，パリ・オペラ座図書館などでの綿密な現物調査を踏まえたうえ，「観客論」という独自の切り口を持った優れた研究書である。Richard BUCKLE の *Diaghilev*（1979年。鈴木晶による邦訳『ディアギレフ』，上巻・1983年，下巻・1984年）とともに，バレエ・リュス研究には欠かせない基本文献だ。

さて，バレエ・リュスに関する文献は単に極めて多数にのぼる，というだけでなく，複数の自伝や回想録をつきあわせると，それぞれの申し立てている「事実」が書物によってかなり異なっていることにすぐに気づく。そこで，ここでは歴史的

事実との相違が既に指摘されている自伝・回想録の類は省き，研究書としてある程度信憑性がある，と考えられるものをごく少数挙げるにとどめておく。

L'Avant-Scène のシリーズから出ている Pierre LARTIGUE 編集の *Le Sacre du Printemps*, L'Avant-Scène: Ballet/Danse, no.3, août/oct. 1980 には，ニジンスキー以後のマシーン，ベジャール，マクミラン，ノイマイヤーらの振付による『春の祭典』の上演記録一覧や，楽曲分析の論文の他，膨大な時間と手間をかけてニジンスキー版の『春の祭典』を蘇演（一旦上演が途絶え，公的な記録や舞踊譜も残されなかった作品を，聞き取り調査などによって再構築して復活上演すること）した Millicent HODSON の論文などが納められている。細かい年代等に時折不整合がみられるものの，趣味の雑誌というよりは，作品を多角的に分析した論文集として読み応えがある。

Jean-Michel NECTOUX (éd), *Nijinsky: Prélude à l'après-midi d'un faune*, Ed. Adam Biro, 1989 には，De MEYER が撮影した『牧神の午後』を踊るニジンスキーのモノクロの写真が多数納められているので，作品の雰囲気を知る上で有用だ。もちろん，当時の撮影技術の限界のため，舞台で実際に上演されている時の撮影ではなく，スタジオで，静止ポーズをとって写したものだ，ということを忘れてはならない。

バレエ・リュス，あるいはニジンスキーに関する展覧会は，バレエ団の消失後数十年以上経った今でも地球上の至る所で行われているが，1980年以降にパリで開催された展覧会カタログの中から，２つだけ挙げておく。

オペラ座図書館＝美術館の Martine KAHANE, アルスナルの Marie-Françoise CHRISTOUT らの共同企画でオーガナイズされた展覧会のカタログ Musée-Galerie de la Seïta, *Nijinsky*, 1989 には，1916年，捻挫をしたために必要になったレントゲン写真によって，ニジンスキーの足は一般の人間の足と解剖学的に全く違った構造を示していること等が記述されている。展覧会ではニジンスキーの着用した衣装等も展示されていたが，そうした展示物の写真が網羅的に掲載されていないのは残念である。

今ひとつは，同じ Martine KAHANE が編纂した，オルセー美術館でのニジンスキー没後50周年記念の展覧会カタログで，*Nijinsky: 1889-1950*, 23 octobre 2000-18 février 2001, Musée d'Orsay (Réunion des Musées nationaux), 2000である。前掲書が1919年にニジンスキーが舞台を降りるところまでだったのとは対照的に，タイトルからも明らかなとおり，本書では1950年にニジンスキーが逝去するまでを扱っている。特に注目すべきは，ダンサーとしての活動から退きつつあったニジンスキーが1917年から書き始めた，30点近い自筆のデッサン画である。円または半円のみで構成されたデッサンには青，赤，黄色などの鮮やかな色彩が施されている。いずれも1930年代にニューヨーク，ロンドンで展示されたあと，1975年にロモラ・ニジンスキーがフランス国立図書館付属のパリ・オペラ座図書館＝美術館に寄贈した作品である。残念ながらカタログには写真が掲載されていないが，展覧会場ではニジンスキーが几帳面な字で書き込んだ自筆の４冊目の手帖（フランス語で書かれたページが開かれていた）がガラス・ケースの中に展示されていた。これがいわゆる『ニジンスキーの手記・完全版』(ロシア語から翻訳した鈴木晶の邦訳は1998年に出版）の一部である。この手帖の本文は展覧会開催時にはフランスではまだ出版されていなかったが，ニジンスキーの配偶者ロモラによる削除等の「検閲」が加えられていない無修正版として，2000年に Actes Sud 社から刊行された Vaslav NIJINSKY, *Journal* に納められている。

ところで，バレエ・リュスに関する研究書や図版集が数え切れないほど出版されているのに比べ，19世紀の後半から20世紀初頭にかけてのバレエ研究は，フランスのみならず英米でも一般的に手薄である。現時点では，ギャラフォラ，ゲストなどが「バレエの衰退」と声をそろえて批判している「ディアギレフ以前」，つまり20世紀初頭のパリ・オペラ座に関するまとまった研究書は出ていない。そのため，本当に彼らの言うとおり，芸術的に価値の低いものが上演されていたのかどうかを確かめるには，パリの図書館で現物調査するより他に方法はない。

幸い，パリ・オペラ座図書館＝美術館には，19世紀はもちろんのこと，20世紀前半のバレエ作品についても，舞台装置のデッサンを複製（写真撮影）したものが作品別にファイル化されている（開架）。他に，バレエ，オペラ作品の舞台衣装のデッサン（20世紀の作品にはしばしば生地見本が一緒に貼り付けてある）も，演目毎に保管されている。「文献紹介」からはすこしはずれるが，BNF の入館資格を獲得し，書籍に限らずデッサン，版画など様々な所蔵資料に直に触れ，有効に活用することは，フランスのバレエに関する研究を進める上で不可欠といえる。

３．ネオ・クラシックとダンス・コンタンポレンヌ（＝コンテンポラリー・ダンス）

バレエ・リュスがパリを席巻したあと，オペラ座のバレエ団はレオ・シュターツらのメートル・ド・バレエによって入れ替わり立ち替わり率いられ，さらに戦前・戦後（1930－45, 1947－58）はセルジュ・リファールが長きにわたってオペラ座

を統率するが，リファール自身が書いた自伝，回想，概説書のたぐいを除けば，この間のバレエに関する研究書は少ない。これに対し，およそ50～60年代以降になると，当時モダン・バレエとよばれ，現在フランスではネオ・クラシックといわれるスタイルの，ローラン・プチやモーリス・ベジャールが華々しく活躍するようになる。両者とも自伝を書いており，ベジャールの自伝についてはすでに邦訳（いずれも前田允訳）が2冊とも出ている。また，研究書としては Marie-Françoise CHRISTOUT, *Maurice Béjart*, La Recherche en Danse, 1987 をあげておくべきだろう。さらに2001年には，1967年から2000年に跨ってベジャールのインタビューを採録した2枚組ＣＤ *Maurice Béjart: Les rêves en mouvement,* Radio France なども発売されている。

ヌーヴェル・ダンス，あるいはコンテンポラリー・ダンスという総称でひとまとまりにされる，我々と同時代の様々な振付家たちについては，一般に写真集やヴィデオ等が手に入れやすく，また，何よりも生の舞台に触れる機会が多いので，ここでは個々には取り上げない。かわりに，コンテンポラリー・ダンスに関する優れた論文集または研究書のいくつかをあげておく。

まず, Laurence LOUPPE, *Poétique de la danse contemporaine*, Contredanse, 1997 は，「呼吸」「スタイル」「空間」といった言葉を分析の道具として，ダンスについて様々に考察をめぐらせた著書である。形而上学的な考察を軸としながら，読みやすく理解しやすいのは，具体的な振付家の作品が挙げてあり，またスーザン・フォスター，ドミニック・デュピュイ，ユベール・ゴダールら同世代の舞踊史・舞踊学の研究者の論文を引用しつつ，明晰に書かれているためである。ルップは *Danses Tracées*, Edition Dis Voir, 1991 の監修者でもある。こちらはルップのほか，ポール・ヴィリリオ（対談），ヴァレリー・プレストン＝ダンロップらが執筆する共著の論文集兼図録で，同タイトルの展覧会開催時に編纂されたものだ。フイエやラバンらの規格化された舞踊記譜法のみではなく，様々な振付家が独自の方法で記したダンスの軌跡と痕跡が目を楽しませる。なお，ヴィリリオとルップによるスリリングかつインスパイアリングな対談は，すでに『インター・コミュニケーション』第11号（1995年・冬号）で翻訳が掲載されている。

これに対し，ルップと同様にパリ第８大学で長く教鞭をとってきたミシェル・ベルナールの著書の多くは，具体的な作品や振付家をとりあげずに考察を進めているため，哲学，とりわけ「現代思想」に格別の興味が持てないかぎり，一般の舞踊研究者にとって必ずしもとりつきやすいものとはいえない。ただし，近著 Michel BERNARD, *De la création chorégraphique*, Centre national de la danse, 2001は，ベルナールの30年に及ぶ考察の総括として書かれたものであるため，概括的であり，比較的読みやすい。

1993年からパリ第８大学で教鞭をとりはじめた若き研究者，イザベル・ロネの労作，Isabelle LAUNAY, *A la recherche d'une danse moderne: Rudolf Laban - Mary Wigman,* Edition Chiron, 1996 が，ラバンのダンスについての舞踊学的考察に力点をおいているのに対し，以前副島博彦が本誌『舞踊学』の「海外舞踊文献紹介」ですでに取り上げた Laure GUILBERT, *Danser avec le IIIe Reich: Les danseurs modernes sous le nazisme,* Editions complexe, 2000 は，タイトルが示す通り，ナチ時代の社会的状況を射程にいれつつ社会史的・文化史的考察が主軸となったものだ。今後は舞踊を，単に芸術史のみでなく広く社会史的コンテクストにおき，ナチズム，人種の問題など，これまでタブーとされてきた領域にも果敢に踏み込んで考察をすすめてゆくことが不可欠になるだろう。

最後に，今年（2002年）出版されたばかりの日本の「舞踏」（いわゆる暗黒舞踏）に関する論文集 ASLAN et PICON-VALLIN (sous la direction de), *Butô(s)*, CNRS Editions, 2002 をあげておきたい。パリ第３大学のジョルジュ・バニュらフランスの研究者に加え，栗原奈名子，國吉和子らの論文が所収された408ページにわたる大部の著作である。山海塾の舞台はパリ市立劇場で公演のたびに満員札止めとなり，伊藤キムは「ブトーの申し子」として，ル・モンド紙で礼賛される，というのが偽らざるフランスの現状であることを鑑みれば，このような論文集が日本語ではなく，フランス語で刊行されていること自体，実は驚くに当たらないのである。

（文中敬称略）

この文献紹介を執筆するにあたり，研究の一部は科学研究費補助金（若手研究Ａ）による助成を受けた。科研費課題番号：14701002

（安田　靜）